

児童一人一人に寄り添う 学級との『かけはし』づくり

不登校児童の状況

対象児童は、小学校3年生である。緊張性頭痛や腹痛があり、教室での学習や他の児童との関わりに不安を抱えていた。保護者は、学校で緊張せずに過ごせる場所を増やすことで、教室に戻れる時間が増えることを希望していた。

物事への強いこだわりがあるため、学校生活全般になじむことが困難な状況だった。緊張から母親と離れることができず、また、多汗による手のひらの湿り気で文字を書く作業にも困難を感じていた。

具体的な取組

○体制

支援会議（担任・SC・SSW・校内別室担当指導員）また、同メンバーにて週4回ほど情報共有の時間を設定している。

校内別室には校内別室担当指導員を常時1名、金曜日は2名配置とした。

○校内別室の活用

令和6年9月に保護者同伴で校内別室への登校を開始した。まずは当該児童が安心して過ごせる環境を整えた。パーテーションで簡易個室を設け、当該児童が緊張せず過ごせる空間を提供した。

○声かけや会話による関係づくり

校内別室での過ごし方について話し合い、一緒に校内別室の時間割を作成した。時間割は学習だけでなく、読書や給食、遊びの時間も組み込み、緊張を和らげ、楽しく過ごせるよう工夫した。遊びは、当該児童の得意な折紙や工作などを一緒に行うことができるようにした。

○保護者との連携

12月からは、当該児童の支度が終わり次第、保護者には一旦帰宅してもらうことで、徐々に母子分離の時間を増やしていった。

○学級復帰のスムーズステップ支援

学級への段階的な復帰を目指し、担任と連携した。別室で過ごす時間割に学級の見学や参加時間を少しずつ加えた。11月には、担任の協力のもと、給食の受け取りやプリントテストなど、短い時間から学級に関わる機会を設けた。特に、図工などの好きな教科から見学や参加を促し、当該児童が安心感と自信をもてるよう支援した。



成果

3学期に入ると、少しずつ一人で登校できるようになっていった。進級後には、毎日一人で登校し、荷物を教室に置きに行くことができるようになった。また、苦手な教科（学活、書写など）にも参加し、総合的な学習の時間のグループ学習では、他の児童と共に発表に参加できるようになった。

課題

校内別室担当指導員が不在の時間や、当該児童が委員会・クラブ活動に参加する時の対応を検討していく。